

大分県の西部、大分市の南西側に臼杵市はある。臼杵は「うすき」と呼び、その由来は臼杵古墳の入口に立っている武人の石像が臼（うす）と杵（きね）に似ており、「うすきね様」と呼ばれていたことから「うすき」という地名ができたと言われている。豊後国風土記」において海人の郡と言われるだけに天然の良港に恵まれ、フグをはじめ海産物の豊富な地域である。

残る江戸期の町割り

戦国時代に豊後、豊前、筑前、筑後、肥前、肥後を支配したキリスタン大名である大友宗麟が臼杵に城を築き、そこから城下町が始まった。この時代には、南蛮船や明船が寄港し豊後府内（現大分市）と共に国際貿易都市として栄

えた。その後江戸時代初期に稲葉氏が美濃の国より、商人

～文化的歴史的所産を巡る～

残したい情景

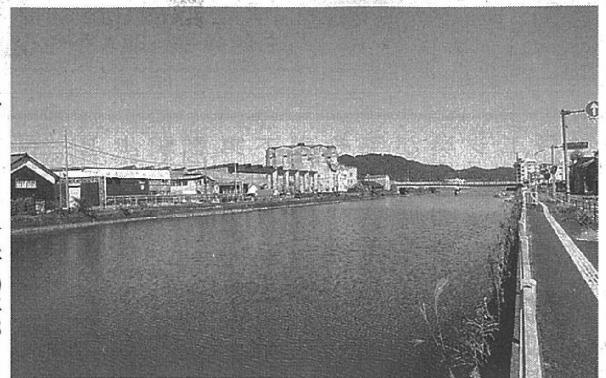
第31回 大分県臼杵市



一般財団法人 日本不動産研究所

ら明治時代には醤油や味噌及び地酒などの醸造業を中心として発展していった。これは臼杵商人の気質と関係があり、臼杵商人は質素・儉約・勤勉で財をなしたと言われている。東九州自動車道「臼杵」ICから臼杵市役所方面へ向かうと、まず県道の西側に臼杵川が現れ、県道東側沿いに龍原寺三重太子塔が迫ってくる。少し行っ

昭和の風情を残す商店街を中州にそびえ立つ醤油・味噌工場は九州一の生産量①



貿易と醸造で栄えた「町八町」

江戸、昭和の人文的資源を残す

たちを引き連れてやってきた。その当時の町割り、現在もそのまま残っている。それが「町八町」と呼ばれる地区である。唐人町・豊屋町・横町・浜町・掛町・本町・田町・新町からなり、当時のままの地名が残っている。区では江戸末期から

県道の西側には、臼杵川の中州全域に九州一の生産量を誇る醤油・味噌工場がそびえ立っており、県道の東側背後に「町八町」地区がある。

人口半減の長期予測

しかし近年、郊外部における大規模商業施設の立地や人口減少・高齢化により、08（平成20）年頃と比べても空家や空地が大きく増加した。国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」によると臼杵市は、00年の総人口が4万5486人から20年（予想）3万5907人（対00年78・9%）、45年（予想）2万1508人（同47・3%）程度になると推測されている。また、総人口に対する生産年齢人口（15～64歳）は、00年が60・2%、20年（予想）が48・3%、45年（予想）が41・8%と推計される。

「町八町」地区に入ると、小道が入り組んだ街区に建物が密集しており、ふぐ料理や割烹等の飲食店舗が多く、江戸時代に創業の造り酒屋や味噌屋など古き時代の建物も多く残っている。一方で電器店、米屋、たばこ屋など日用品店舗も建ち並んでおり、江戸時代の商人街と昭和時代の



江戸時代の風情を残す味噌屋と造り酒屋

臼杵市には、国宝である「臼杵石仏」や武家屋敷群の石畳の街並である「二王座歴史の道」が観光施設として整備されているが、「町八町」地区においても、歴史的意義のある人文的資源として、また夕暮れ時に店主と馴染み客との声が飛び交うような商店街として残してほしい風景である。（大分支所／不動産鑑定士・上治昭人）